

めている。内外面ともナデによる調整が行われている。これらの瓦質土器は、中世期の資料と考えられる。73は、製塙土器である。六連式と呼ばれる砲弾状を呈するもので、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。内外面とも手捏ねで作られ、指頭圧痕が顯著に認められる。

74は、唐津焼の皿である。底部から体部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外反して内側に折り曲げている。低く扁平な高台を有し、内外面は回転ナデ、底部は糸切り後、ナデによる調整が行われている。また、坏部内外面の口縁部から体部上位にかけて白色の釉がかかっている。近世初頭頃の資料であろう。75は、肥前系の磁器皿である。高台部は短く直立し、端部は平坦におさめている。外面底部を除いて内外面とも淡緑白色に施釉され、内面見込みは蛇の目状に釉を剥ぎ取っている。76は肥前系の磁器碗である。高台部は直立し、端部は平坦におさめている。高台端部を除いて全面が淡黄色に施釉されている。77は、唐津焼の皿である。高台部は低く扁平で、内面坏部は灰黄色に施釉され、砂目積みの痕跡が認められる。78も唐津焼の皿で、高台部は短く直立し、端部は平坦におさめている。坏部内面は灰色に施釉され、内面見込みは蛇の目状に釉が剥ぎ取られている。

79・80は、須恵質の平瓦である。79は、表面が刺突状のタタキ、裏面はナデによる調整が行われている。80もほぼ同様の調整が行われている。古代から中世期にかけての資料であろう。81は、轍の羽口である。先端部の破片と考えられ、金属漆の付着が認められる。

81～85は、管状土錐である。いずれも全面がナデ調整されており、82は完形、84は朱塗りの痕跡が認められる。角田遺跡からは多くの管状土錐が出上しており、農耕とともに神戸川や神門水海を背景として漁労が重要な生活基盤となっていたことを窺わせる資料である。86は、銅製の煙管である。雁首と吸口に鷲と雲の図柄が印刻され、吸口下端部には銅板の継目が認められる。87は、曲物の底板であろう。連結用の目釘穴が4ヶ所に認められる。樹種には杉を用いている。

### 3. 小 結

当該地においては、溝状遺構33、上坑状遺構25のはか掘立柱建物跡や柱穴列を含むピット状の遺構を多数検出している。遺構には、古墳時代前期前葉から近世に至るまでのものが複雑な切合関係をもって検出されており、時代的にも多岐にわたっている。中心となる時期は12～13世紀にかけての中世期であるが、そのほか古墳時代前期前葉、奈良時代から平安時代初期頃、近世の遺構と時期的に区分できる。

古墳時代前期前葉頃の遺構としては、水路あるいは集落を環繞する環濠と考えられるSD06があり、遺物の出土量も多い。その他、旧河道からも当該期の遺物が多く出土している。SB01からもわずかながら当該期の遺物が出土しており、当該期の遺構である可能性をもつものである。

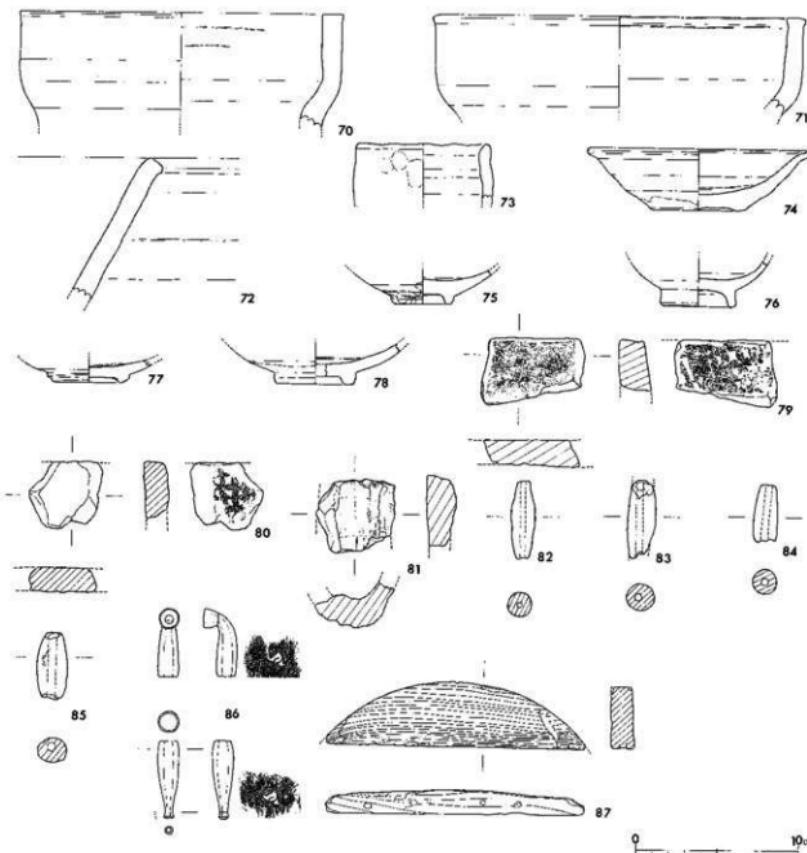
奈良時代から平安時代初期頃にかけての遺構には、水路あるいは旧河道と考えられる溝1～溝5、建物跡の区画を示すSD15～SD17などがある。このうちSD15～SD17は南南西一北北東に基軸をもつもので、54Gr以東で検出されたものと基軸を同一にしている。また、井戸と考えられるSK12やSK21なども検出されている。

中世期の遺構は最も多く、水路と考えられるものにはSD20・SD21・SD25・SD26がある。このう

ち、SD20・SD21・SD26 からは鉄滓が出土しており、鍛冶関連施設に伴う溝である可能性をもつ。井戸跡と考えられるものには SK16・SK20、土壙墓には SK18 などが検出されている。

近世の遺構は少ないが、SK05・SK07 の土壙墓を検出している。いずれも人骨とともに鏡や数珠玉を副葬するもので、当該期の墓制を知る上で貴重な資料となっている。そのほか、ピット状遺構には掘立柱建物跡である SB01 や塀あるいは柵として機能していたと考えられる柱穴列なども検出されている。

遺物には、中世土師器を中心として弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、磁器、陶器などの土器のほか、石器や木製品も出土している。



第101図 遺構外出土遺物実測図(3)

弥生土器には、壺や壺の頸部にヘラ描直線文や胴部に斜軸木葉文を施した前期後葉墳のものが多く出土しており、出雲平野では稀少な資料となっている。また、特異な遺物としては、古瓦や鉄滓、轆の羽口がある。古瓦は調査区内で 10 点余り検出されており、付近に古代から中世期にかけての寺院あるいは官衛施設の存在が窺える。また、時期の異なる古瓦が出土していることから、何回かの建て直しが行われた可能性が強い。鉄滓は分析の結果、精錬鍛冶滓と考えられ、轆の羽口も出土していることから、近辺で小鋳造が行われていたことが窺える。

角田遺跡で弥生時代前期前葉や古式土師器が出土したことは、遺跡の複合性を示すものとして新たな知見であった。おそらく南に位置し、大集落遺跡と目されている宮松遺跡にその中心があるものと考えられ、今後、関連を注視していく必要がある。

#### 註

- (1) 中村唯史氏（島根県立三瓶自然館指導員）のご教示による。
- (2) 『中野西遺跡』 出雲市教育委員会 2002 年
- (3) 『井原遺跡発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 2002 年
- (4) 『天神遺跡第 7 次発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1997 年
- (5) 『山持川川岸遺跡』 出雲市教育委員会 1996 年
- (6) 『古志本郷遺跡 I』 島根県教育委員会 1999 年
- (7) 『下古志遺跡』 出雲市教育委員会 2001 年
- (8) 『宅丁田遺跡発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1998 年
- (9) 『三田谷 I 遺跡 vol. 3』 島根県教育委員会 2000 年
- (10) 株式会社 吉田生物研究所の樹種同定報告書による。
- (11) 『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ』「大井谷 II 遺跡」  
出雲市教育委員会 2001 年
- (12) 『上長浜貝塚』 出雲市教育委員会 1996 年
- (13) 『蔵小路西遺跡』 島根県教育委員会 1999 年
- (14) 『松江市大庭町黒田畦字土居・字神主屋敷所在遺跡』 島根県教育委員会 1982 年
- (15) 『京殿遺跡調査概報』 三刀屋町教育委員会 1979 年
- (16) 『矢野遺跡第 2 地点発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1991 年
- (17) 『藤ヶ森遺跡（I 地点・II 地点）発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1998 年
- (18) 『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ』「大井谷 I 遺跡」  
出雲市教育委員会 2001 年
- (19) 『出雲市埋蔵文化財調査報告書第 8 集』 出雲市教育委員会 1998 年
- (20) 『天神遺跡第 9 次発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1999 年

## V. 自然科学分析

## V. 自然科学分析

### 角田遺跡出土製鉄関連遺物の分析調査

安来市体育文化振興財団・和銅博物館 村川 義行

角田遺跡発掘調査で出土した製鉄関連遺物について分析調査した結果を報告する。

#### 1. 供試材明細および分析調査方法

##### 1-1 供試材

表1に資料明細を示す。

表1 資料明細

No.	遺跡名	層位・遺構名	推定年代	重量(g)
KKT-1	角田遺跡 C 46	SD 21 北岸		136

##### 1-2 調査項目および方法

###### (1) 目視観察

目視による外観形状、色調などの観察。

###### (2) 顕微鏡組織

実測図に示した位置から切出して樹脂に埋め込み、エメリーリング紙の# 150、# 240、# 320、# 600、# 1000と順を追って研磨し、最終はダイヤモンドの $3\ \mu$ ～ $1\ \mu$ で仕上げてから金属組織および鉱物相を観察した。

###### (3) 化学組成分析

供試材の化学組成分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (T·Fe)、金属鉄 (M·Fe)、酸化第一鉄 (FeO)：容量法。

硫黄 (S)：燃焼赤外線吸収法。

二酸化珪素 (SiO<sub>2</sub>)、酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K<sub>2</sub>O)、酸化ナトリウム (Na<sub>2</sub>O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>)、酸化クロム (Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、五酸化磷 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、バナジウム (V)、銅 (Cu)：誘導結合プラズマ発光分光分析 (ICP 法)。

## 2. 調査結果

### 2-1 目視観察

資料の外観写真を写真1. に示す。

厚さ 10～15 mm、上面は滑らかでやや凹型、下面はやや凸型で微少円形の凹みがあり、全体に扁平である。色調は灰緑色で、磁着反応はやや強である。

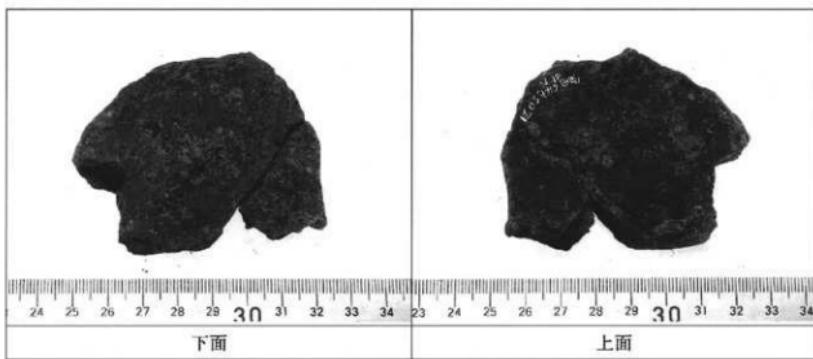


写真 1. 調査資料の外観

## 2-2 顕微鏡組織

光学顕微鏡観察によるミクロ組織を写真2に示す。

灰白色の球形結晶はウスタイト ( $W_7stite : FeO$ ) と黒灰色木ずれ状の結晶はファイヤライト (Fayalite:  $2FeO \cdot SiO_2$ ) が、暗黒色のガラス質基地中に晶出した組織を示し、鍛冶滓の鉱物組織の特徴を示す。

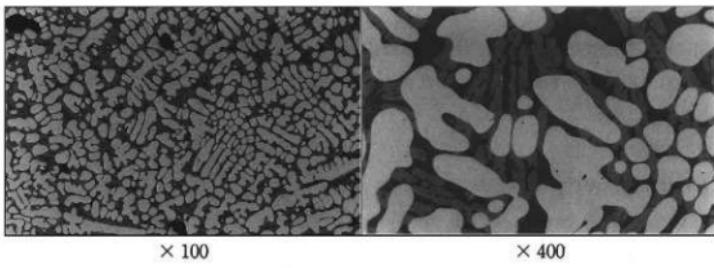


写真 2. 資料の顕微鏡観察組織

## 2-3 化学組成分析

資料の化学成分分析値を表2に示す。また、これらをまとめた結果を表3に示す。

全鉄分 (T·Fe) は 49.20%、金属鉄 (M·Fe) は 0.36% でやや高めであり鍛冶滓の範疇に近い値である。また、ガラス質成分 ( $SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$ ) は 27.87% で、このうち塩基性成分 ( $CaO + MgO$ ) を 2.42% 含んでいる。これらの値は製練滓と鍛冶滓の中間的な値であるが、顕微鏡組織観察で鍛冶滓の鉱物組織の特徴を示すことから精錬鍛冶滓と考えられる。また、酸化第2鉄 ( $Fe_2O_3$ ) が 22.85% は鍛冶滓としては比較的少ないが、酸化第1鉄 ( $FeO$ ) が 42.27% で多めであり還元性雰囲気下で形成された鍛冶滓と推定されることからも精錬鍛冶滓に分類するのが妥当である。

る。一方、砂鉄特有の二酸化チタン ( $TiO_2$ ) は 1.10% で高め、バナジウム (V) も 0.16% で高めで砂鉄系原料を始発としていると思われる。酸化マンガン ( $MnO$ ) は 0.20% で少量含むが、銅 (Cu) は 0.01% で高めの成分系といえる。

表 2. 化学成分分析値 (wt%)

$SiO_2$	$MnO$	$CaO$	$MgO$	$P_2O_5$	S	$TiO_2$	$Al_2O_3$
18.68	0.20	1.78	0.64	0.25	0.035	1.10	5.41

$V_2O_5$	Cu	$Na_2O$	$K_2O$	$Fe_2O_3$	FeO	T·Fe	M·Fe
0.16	0.01	0.21	1.15	22.85	42.27	49.20	0.36

表 3. 鉄滓の調査結果まとめ

顕微鏡組織	化学組成 (wt%)								所見
	T·Fe	$Fe_2O_3$	塩基性成分	$TiO_2$	$V_2O_5$	$MnO$	ガラス質成分	Cu	
W+F	49.20	22.85	2.42	1.10	0.16	0.20	27.87	0.01	精鍊鍛冶滓

W: ウスタイト (Wüstite :  $FeO$ )、F: ファイヤライト (Fayalite :  $2FeO \cdot SiO_2$ )

### 3. まとめ

砂鉄系原料を始発とする精鍊鍛冶滓と推定される。

本調査の分析は日立金属（株）冶金研究所およびハイメック（株）中国事業所で実施した。

## 角田遺跡発掘調査における自然科学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント）

### はじめに

本報告は、遺跡周辺での農耕を含む古植生推定のために、出雲市が、文化財調査コンサルタント㈱に委託して実施した2年度に渡る花粉分析およびプランツ・オパール分析調査報告書を簡略化し、さらに加筆・修正を行ったものである。

また、角田遺跡は島根県中央部の出雲市上塩治町に立地する遺跡である。

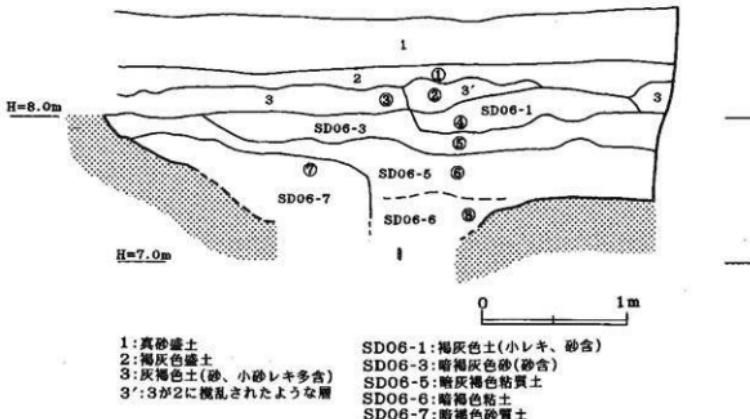
### 試料について

分析試料は全て、出雲市との協議の上文化財調査コンサルタント㈱が採取したものである。図1に試料採取地点を示す。また、図2～4の各ダイアグラムに模式柱状図、および各地点での分析試料のおおよその層準を示す。

### 分析方法

花粉分析処理は渡辺（1995）に、プランツ・オパール分析処理は藤原（1976）のグラスピーズ法にしたがっている。

全ての分析の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。またイネ科花粉を中村（1994）に基づき、イネを含むイネ科（40ミクロン以上）と、栽培種を含む可能性の低いイネ科（40ミクロン未満）に細分した。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。プランツ・オパール分析ではグラスピーズが400個体以上になるまで検鏡を行い、同時に検出される分類可能なものの同定を行った。



第102図 試料採取地点位置図

## 分析結果

分析結果を図2、3の花粉ダイアグラム、図4のプラント・オパールダイアグラムに示す。

花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。また、花粉ダイアグラム右側に「針葉樹花粉」、「広葉樹花粉」、「草本花粉」に「胞子」を加えた総合ダイアグラムを示している。総合ダイアグラムでは、計数値の合計を基数にそれぞれの百分率を算出し、累積百分率で示してある。

プラント・オパールダイアグラムでは、各分類群毎に検出数を1gあたりの含有数に換算し、スペクトルで示している。

### 花粉分帶

分析結果を基に、角田遺跡での地域花粉帯を再設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

#### (1) II帯 (溝3: 試料No 12 ~ 9、SD06: 試料No 8)

出土遺物から SD06: 試料No 8 が溝3: 試料No 12 ~ 9 の下位に相当すると考えられる。一部の試料で、スギ属、アカガシ亜属が突出した出現率を示すが、一般的な傾向としてマツ属（複維管束亜属）、スギ属が高率を示す。またアカガシ亜属、コナラ亜属も他の種類に比べやや高い出現率を占める。

イネ科（40ミクロン以上）の出現率が、SD06: 試料No 8、溝3: 試料No 10、9 では高く、間の溝3: 試料No 12、11 ではやや低い出現率を示す。このことから、SD06: 試料No 8 をc亜帯、溝3: 試料No 12、11 をb亜帯、試料No 10、9 をa亜帯とした。

#### (2) I帯 (溝3: 試料No 8 ~ 1、SD06: 試料No 4 ~ 1)

木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）が、草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が卓越する。溝3: 試料No 8、7、SD06: 試料No 4 ではマツ属（複維管束亜属）の他、スギ属が特徴的に出現する。溝3: 試料No 6 ~ 3、SD06: 試料No 3、2 ではスギ属は低率になり、コナラ亜属がやや高率になる。さらに溝3: 試料No 2、1、SD06: 試料No 1 では再度スギ属が増加傾向を示すようになる。

上記の各試料を採取した堆積物の多くは、出土遺物から奈良～平安時代以降時期を示すが、SD06: 試料No 4 を採取した SD06-1層は古墳時代前期に堆積したと考えられている。SD06: 試料No 4 では花粉化石の検出量が少なかった。また試料No 4 を採取した SD06-1層全体から酸化鉄や酸化マンガンの沈着、生物擾乱が認められていた。これらのことから SD06: 試料No 4 では、本来含まれていた花粉化石の多くが化学反応を受け、溶解したと考えられる。したがって検出された花粉化石には、化学反応に耐え選別された可能性や、生物擾乱により上位の層準から混入したものである可能性がある。一方溝3の各試料からは花粉化石が豊富に検出され、化学反応による溶解や生物擾乱による混入の可能性は低い。したがって SD06: 試料No 4 の時代観のズレは、SD06-1層での花粉化石の選別的な溶解や、上位からの混入により起こった可能性が高い。

スギ属の出現傾向から、溝3: 試料No 8、7、SD06: 試料No 4 をc亜帯とされる所であるが、堆積時期が大きく外れること、検出された花粉化石（花粉組成）が堆積後に付加された可能性があることなどから、溝3: 試料No 8、7 をc亜帯、SD06: 試料No 4 をc'亜帯とした。また同様に、スギ属の出現

傾向から溝3: 試料No 6～3、SD06: 試料No 3、2をb亜帯、溝3: 試料No 2、1、SD06: 試料No 1をa亜帯とした。

## 古環境変遷

花粉分帯に対応する時期毎に、花粉分析結果より遺跡周辺の古植生を推定する。

### (1) II帯期（弥生時代前期後半～奈良・平安時代）

ここで得られた花粉組成変遷、そこから推定される森林植生は、近隣の三田谷遺跡で得られた分析結果、解析結果（渡辺、2000 a, b）とはほぼ一致する。

#### 1) 周辺地域の植生

スギ属が卓越するが、角田遺跡の集水域は大井谷川流域のみであることから、遺跡近辺から大井谷川流域にはスギ林が分布していたと考えられる。また遺跡近辺には、コナラ類やアカマツを要素とする二次林や、カシ類、シイ類を要素とする照葉樹林の分布も推定される。

#### 2) 調査地近辺の植生

##### ①c亜帯期（弥生時代前期後半）

イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が高いことから、SD06流域で稲作が行われていた可能性が指摘できる。しかし、イネのプラント・オパールが検出できなかったこと、「雑草」の花粉量が多いこと、イネ科（40ミクロン以上）花粉が必ずしもイネを示すものでないことなど、稲作が行われていたことに否定的な要因も存在する。

花粉化石はほとんど検出できなかったが、古墳時代前期に堆積したと考えられているSD06-3層（SD06: 試料No 5層準）では、イネ、キビ族型のプラント・オパールがわずかに検出される。したがって、この層準堆積時にSD06流域でイネやキビが作られていた可能性が指摘できる。また、SD06-3層の広がりが明らかでないことから、この層そのものが耕作土層であった可能性も残る。

##### ②b亜帯期（奈良～平安時代）

イネ科（40ミクロン以上）花粉が増加傾向を示すものの、比較的低率であり、稲作に直接結びつけるような出現率ではなかった。イネ科やカヤツリグサ科の生育する湿地や、ヨモギ属の生育する草地が溝3流域に広がっていたと考えられる。

##### ③a亜帯期（奈良～平安時代）

イネ科（40ミクロン以上）が高率を示し、溝3流域で稲作が行われる様になったと考えられる。また、水田内には、オモダカ類やセリ類など多くの雑草が生育していた可能性もある。ガマ類などは水田内に雑草として生育していた可能性もあるが、溝の縁や近辺の湿地に生育していたのではなかろうか。またヨモギ属の生育する草地も広がっていたと考えられる。

### (2) I帯期（奈良～平安時代以降）

#### 1) 周辺地域の植生

c'亜帯としたSD06: 試料No 4については、花粉組成の意味する物が不明確であることから、古環境復元の対象から除いた。

またI帯での花粉組成変遷は、II帯同様、同時期の三田谷遺跡の花粉組成（渡辺、2000 b）と類似する。

### ①c亜帯期（奈良～中世）

マツ属（複維管束亜属）花粉が増加傾向を示し、角田遺跡周辺の丘陵でアカマツ林（いわゆる「里山」、「薪炭林」）が拡大していたと考えられる。また、スギは遺跡近辺あるいは大井谷川上流の谷斜面に分布していたと考えられる。

### ②b亜帯期（中世～近世）

マツ属（複維管束亜属）花粉が卓越することから、角田遺跡周辺の丘陵にはアカマツ林（いわゆる「里山」、「薪炭林」）が広がったと考えられる。

### ③a亜帯期（近・現代？）

b亜帯から引き続き角田遺跡周辺の丘陵にはアカマツ林（いわゆる「里山」、「薪炭林」）が広る反面、スギの植林が広がったと考えられる。

### 2) 遺跡近辺の植生

#### ①c亜帯期（奈良～中世）

イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が高いほか、ソバ属などの栽培関連の花粉が検出できた。プラント・オパール分析を実施していないものの、調査地点近辺あるいは上流で稲作やソバの栽培が行われていた可能性が高い。

#### ②b亜帯期（中世～近世）

イネ科（40ミクロン以上）、ソバ属花粉に加え、アブラナ科花粉も高率になり、遺跡近辺でのアブラナ（ナタネ）栽培の可能性も指摘できる。

#### ③a亜帯期（近・現代？）

遺跡近辺で稲作に加えアブラナ、ソバなどが栽培されていた可能性がある。ただしアブラナ科花粉はSD06でのみ高率を示しており、アブラナはSD06近辺でのみ栽培されていた可能性がある。

## まとめ

花粉分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

(1) 花粉分析結果から、本地域の花粉化石群集をI、II带の2花粉帶に分帯し、それぞれの花粉帶をさらにa～c亜帶に細分した。

(2) 弥生時代前期後半から近・現代に至る遺跡周辺の古植生変遷を推定した。特筆すべき事がらは以下の通りである。

①近隣の三田谷I遺跡で得られた花粉組成変遷との整合性が高かった。

②I带下位のSD06-3層（試料No.5の層準）では、わずかながらイネ、キビ族型のプラント・オパールが検出できた。花粉がほとんど検出できなかったが、SD06流域での耕作あるいは、この層準が耕作土層であった可能性が指摘できる。

③調査地点近辺（あるいは上流部）では、弥生時代前期後半に稲作が行われていた可能性がある。

④調査地点近辺では、中世以降、稲作に加えアブラナ、ソバの栽培が行われていたと考えられる。

図2 構3の実際ダムでアリ



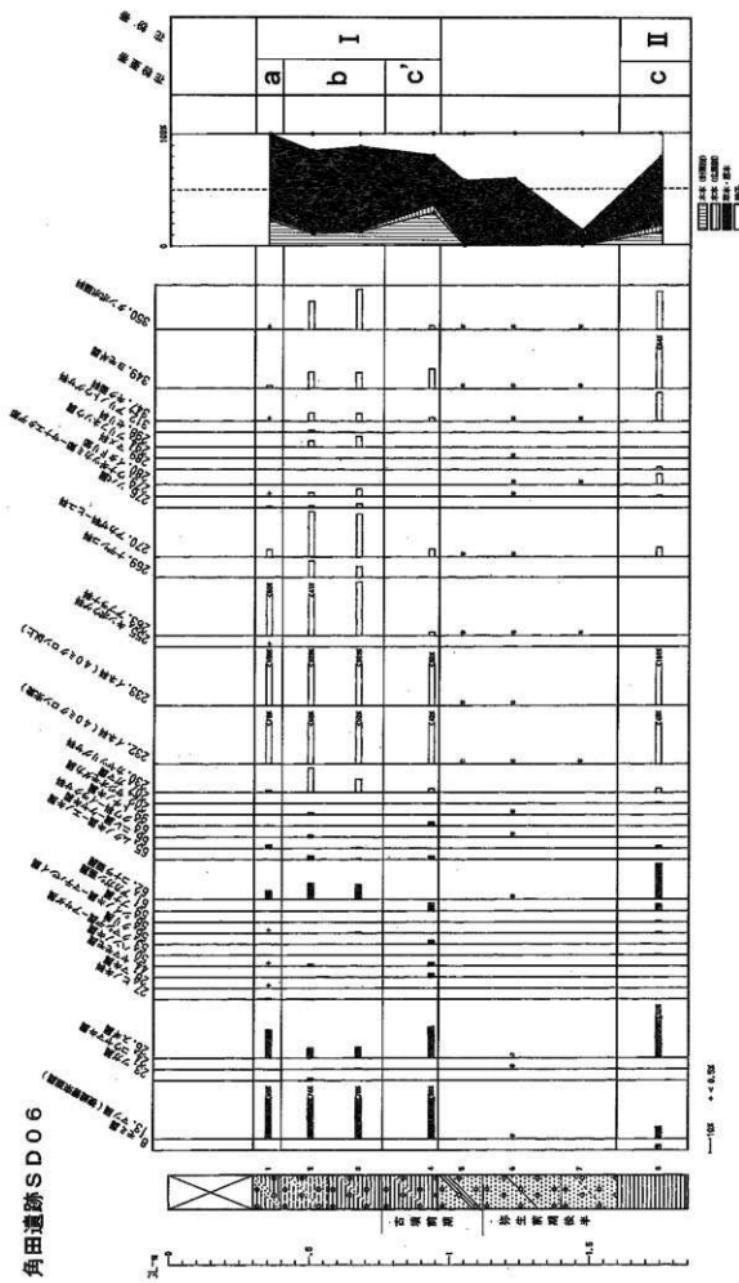


図3 SDO6 の花粉ダイアグラム

### 角田遺跡 S D O 6

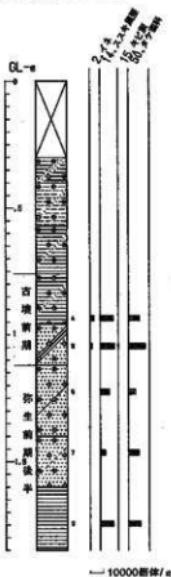


図4 SDO6 のプラントパールのダイアグラム

### 引用文献

- 川崎地質㈱（1999）姫原西遺跡における花粉・珪藻分析。一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1－姫原西遺跡－, 191-203. 島根県教育委員会。
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として。第四紀研究, 13,187-197.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物 の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 渡辺正巳（1995）花粉分析法。考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社。
- 渡辺正巳（2000 a）三田谷 I 遺跡 94・95 年度発掘調査に係る花粉分析。斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX－三田谷 I 遺跡 Vol.3 －, 117-122. 島根県教育委員会。
- 渡辺正巳（2000 b）三田谷 I 遺跡c区発掘調査に係る花粉分析。塩治 299 号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－三田谷 I 遺跡－, 65-70. 出雲市教育委員会。

## VI . 総括

## VII. 総括

### 1. 地理的環境

角田遺跡が所在する周辺には、南には大集落遺跡と推定されている宮松遺跡のほか、国指定史跡である上塙治築山古墳、上塙治地藏山古墳など県下を代表する古墳時代後期の横穴式石室墳があり、特に古墳時代後期になってから大きな経済力を基盤とした政治勢力の台頭がみられる。さらに西方には天神遺跡、高西遺跡など、弥生時代の拠点集落と目される遺跡が営まれるほか、北方には近年の開発によって中世を中心とする藤ヶ森Ⅰ遺跡、Ⅱ遺跡などが相次いで発見されている。

出雲平野を取り巻く地形には、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野はこの二大河川によって形成された沖積平野となっている。

しかしながら、遺跡が形成され始めた頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。奈良時代に編纂された『出雲國風土記』によれば、現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川が、当時は西流して入海のような状況を呈していた湯瀬(現在の神西湖)に注いでいたようである。そして、斐伊川が西流していた当時は、神門水海の北方に注いでいたようである。

このような地形のもと、角田遺跡は神戸川が南部丘陵から入海へと注ぐ平野の入口付近に位置する旧自然堤防上に立地していたと考えられる。

### 2. 遺構

角田遺跡が営まれた時期は、弥生時代前期後葉頃から近世に至るまで多岐に及んでいるが、ここでは主要な時代と遺構についてそれぞれ総括しておきたい。

#### 【弥生時代前期前葉】

角田遺跡に遺跡が営まれた初源である。確実な遺構は検出されていないが、旧河道やSD06などから遺物が出土している。このことから角田遺跡でも当該期に生活が営まれていたことが窺える。南に位置する三田谷Ⅰ遺跡においては縄文時代晚期頃から集落が営まれており、稻作の伝播を背景として平野部に進出してきたものと考えられる。なお、遺構が検出されていないことから、南に位置する宮松遺跡との関連を今後も注視していく必要がある。また、弥生時代中期から後期前葉にかけての遺物や遺構は皆無であり、この時期には生活の場としては利用されなかったようである。

#### 【古墳時代前期前葉】

この時期の確実な遺構としては、SD06を検出している。規模や形状などから、水路あるいは集落を囲繞する環濠と考えられており、遺物の出土量も多い。これらの遺物には、畿内系や西部瀬戸内系の遺物も含まれていることから、人的交流とともに集落の飛躍的な発展が窺われる。また、旧河道や掘立柱建物跡であるSB01からも当該期の遺物が出土している。しかしながら、調査区全体をと

おしても遺構の検出数は少なく、南に位置する宮松遺跡に生活域としての基盤があったものと考えられる。

#### [奈良時代～平安時代初期]

角田遺跡が生活域としての基盤構えた時期にあたる。遺構としては溝状遺構や土坑状遺構を多数検出している。このうち、SD15～SD17は当該期の建物跡を区画する溝と考えられるもので、周辺からは柱穴列なども検出されている。また、井戸や水路なども検出されており、遺物の出土量もかなり多く、確実に居住域として利用されていたことが窺える。

#### [平安時代後期～中世期]

角田遺跡が最も繁栄した時期にあたる。基軸を同一にし、建物を区画する溝と考えられるSD35やSD37などが検出されており、周辺では柱穴列も多く検出されている。また、井戸跡や土壙墓と考えられる遺構も多数検出されている。この中でもSD20・SD21・SD26からは鉄滓や輪の羽口が出土しており、鍛冶関連施設に伴う溝である可能性もある。また、古瓦には当該期のものが多く出土しており、付近に寺院あるいは官衛施設の存在していた可能性がある。また、時期の異なる古瓦が出土していることから、何回かの建て直しが行われたものと考えられる。

#### [近世]

遺構としては、土壙墓であるSK05・SK07が検出されている。当該地は近世以降には水田として利用されていたものと考えられることから、一時的に墓地として利用されたものであろう。

### 3. おわりに

今回の発掘調査で角田遺跡は、弥生時代前期後葉から近世に至るまで、一時衰退はあるものの連続と集落が営まれ、複合集落遺跡であることが明らかになったことは大きな成果であった。また、古代から中世期にかけての寺院あるいは官衛施設や中世期の鍛冶関連施設の存在が知られたことは新たな知見であった。しかしながら、調査範囲が極めて限定されていたこともあり、遺跡の性格を十分に把握することはできなかった。その中にあって、南に位置し、大集落遺跡と目される宮松遺跡との関連を今後注視していくことが必要である。今後、調査する機会があれば遺跡としての実態を明らかにし、郷土の財産として後世に伝えていくことが望まれる。

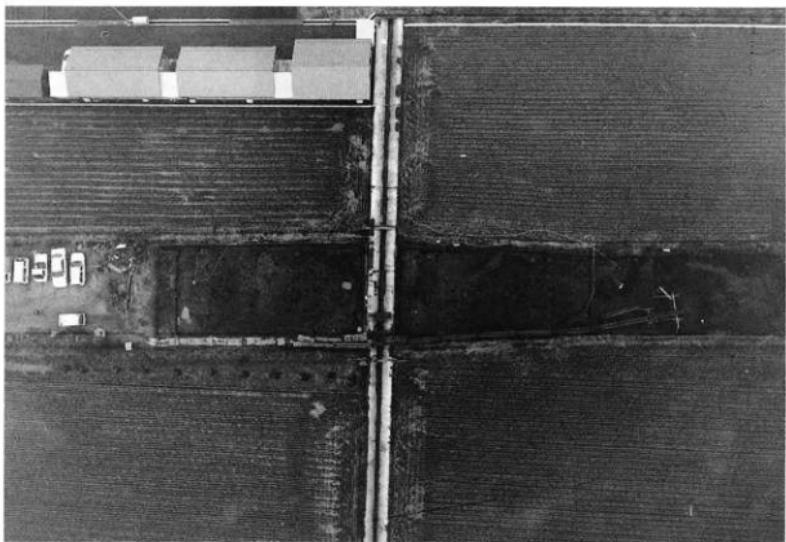
## 図版

### 54Gr～63Grの調査

図版1



角田遺跡上空より北山を望む



54Gr～63Gr 空中写真

図版2



62Gr～63Gr 遺構検出状況



59Gr～61Gr 遺構検出状況



59Gr～60Gr 遺構検出状況



57Gr～58Gr 遺構検出状況



SD34 土層断面



SD37 土層断面

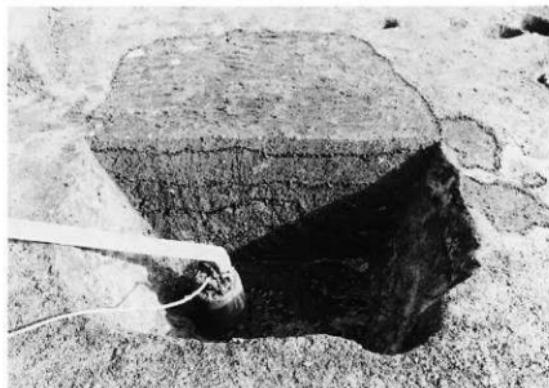
図版4



SK27 土層断面



SK28 土層断面



SK29 土層断面



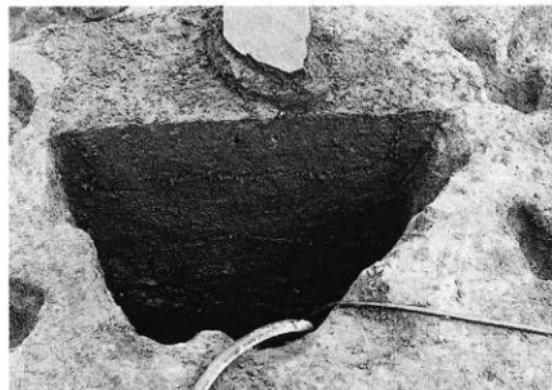
図版6



SK32 土層断面



SK33 土層断面



SK34 土層断面



SK35 土層断面



SK38 土層断面



SK39 土層断面

図版8



B55Gr P02 柱根検出状況



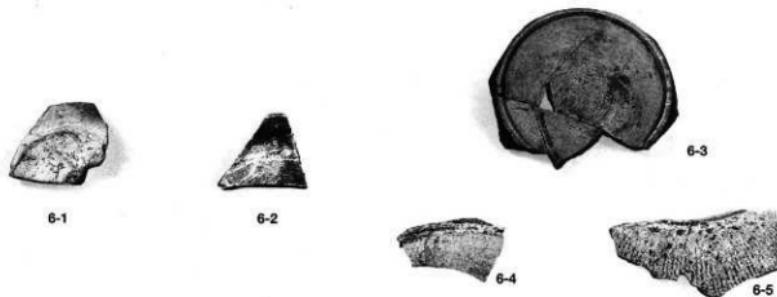
B60Gr P05 柱根検出状況



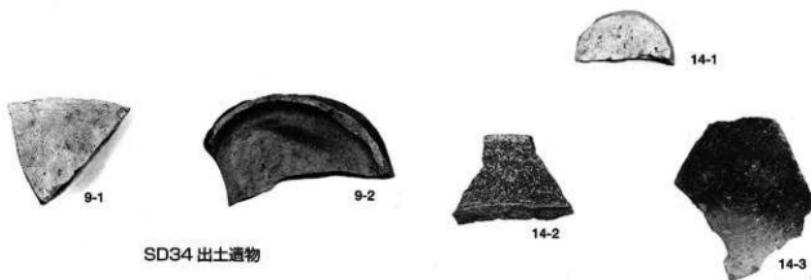
現地説明会風景



遺構外出土古銭

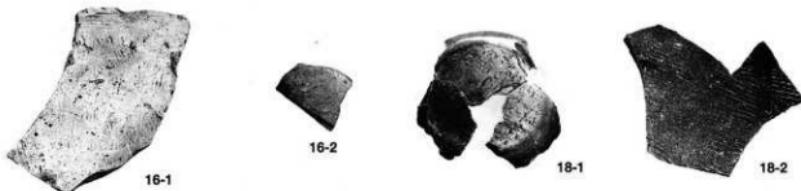


SD31 出土遺物



SD34 出土遺物

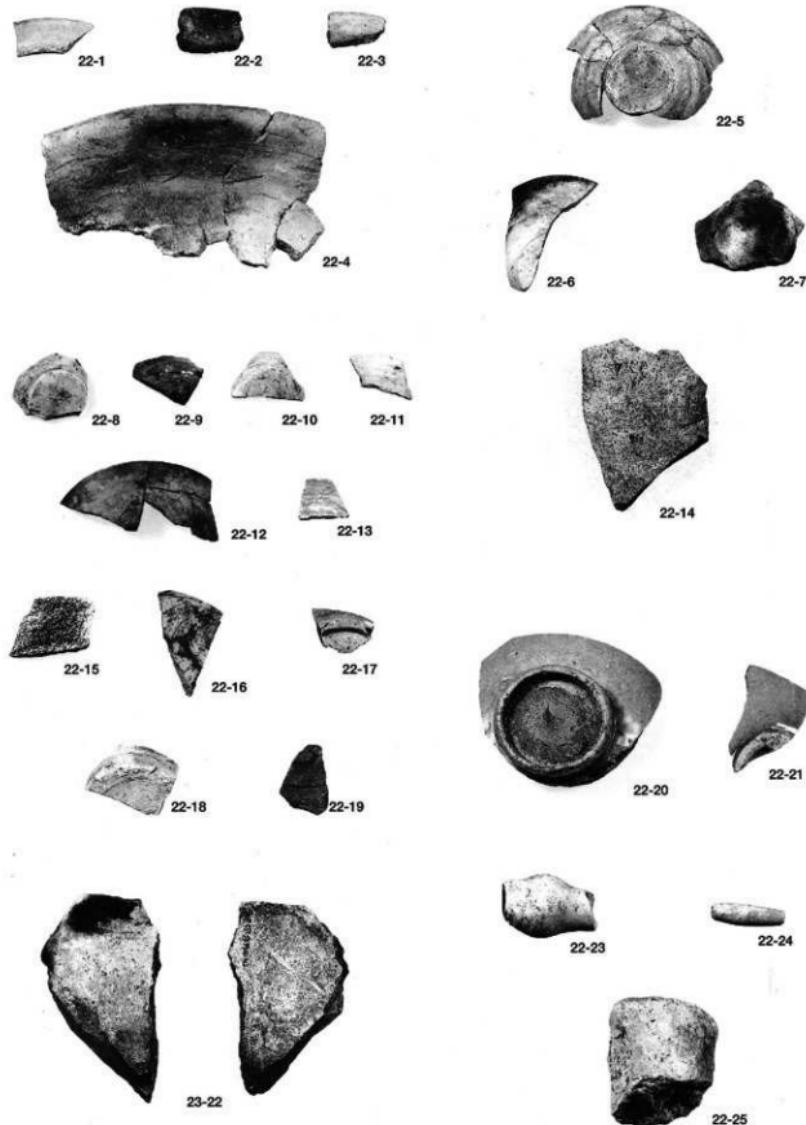
SK29 出土遺物



SK31 出土遺物

SK35 出土遺物

図版10



遺構内出土遺物

図版11



23-26



23-27



23-28



23-29

遺構内出土遺物

23-30



23-30



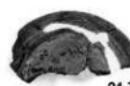
24-1



24-2



24-6



24-7



24-3



24-4



24-5



24-8



24-9



22-10



22-11



24-13



24-14



24-15



22-12



24-18



24-19



24-23



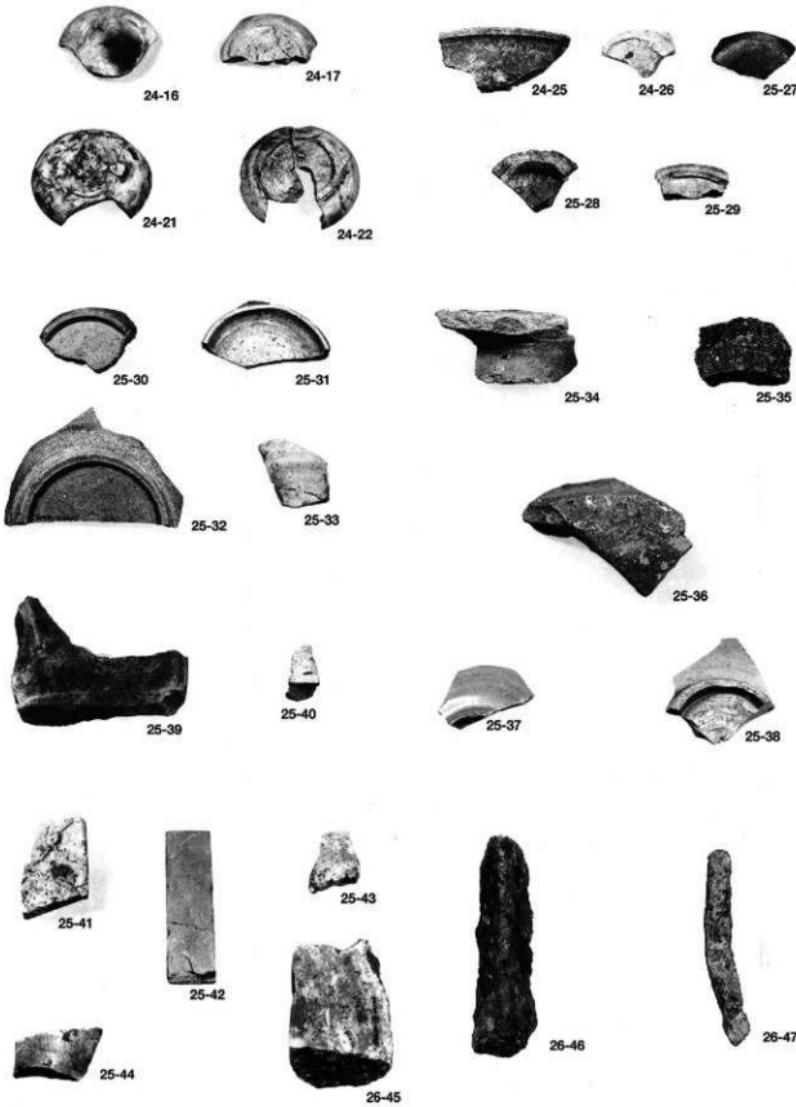
24-24



24-20

遺構外出土遺物

図版12



遺構外出土遺物

## **図版**

### **5Gr ~ 53Gr の調査**



旧河道 遺物出土状況



旧河道 遺物出土状況



旧河道検出状況

図版14



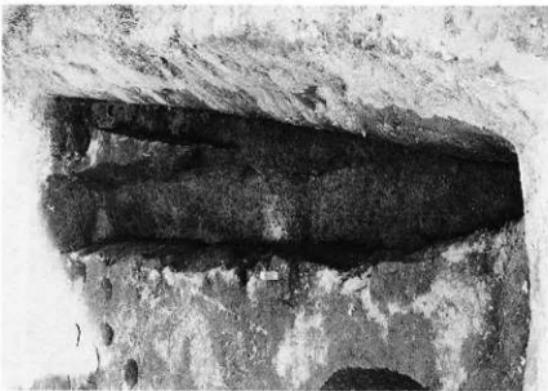
SD01 遺物出土状況



SD01 完掘状況



SD03 遺物出土状況



SD03 完掘状況



SD06 遺物出土状況



SD06 完掘状況

図版16



24Gr～29Gr 完掘状況

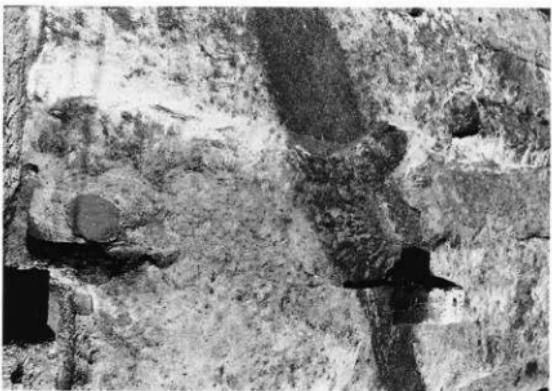
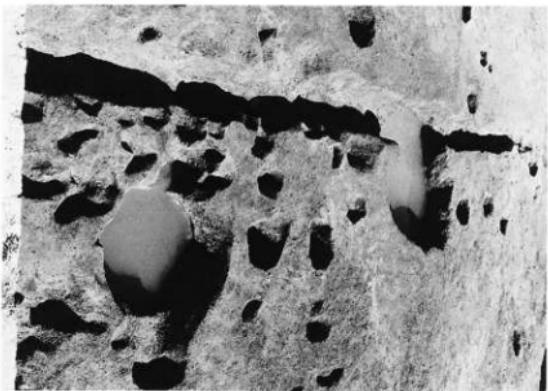


SD21 完掘状況



SD22 完掘状況

図版17



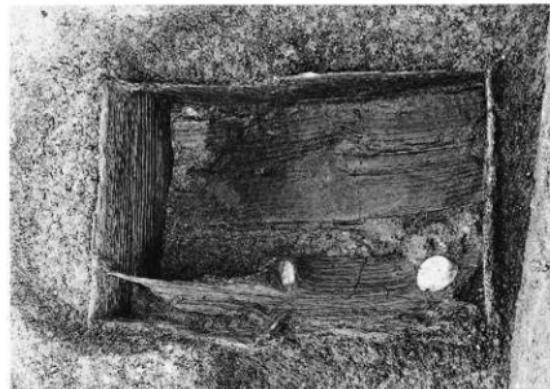
图版18



SK05 遗物出土状况



SK05 遗物出土状况



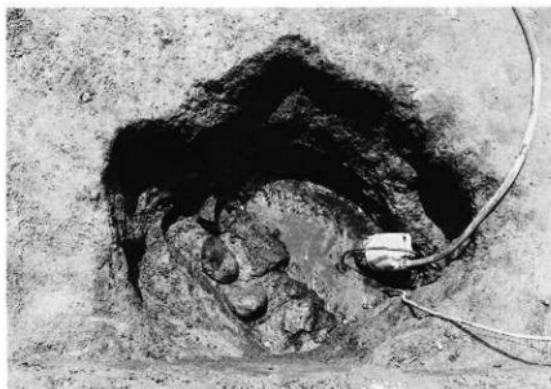
SK07 遗物出土状况



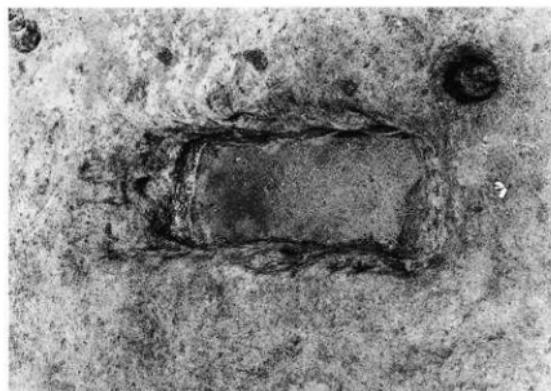
図版20



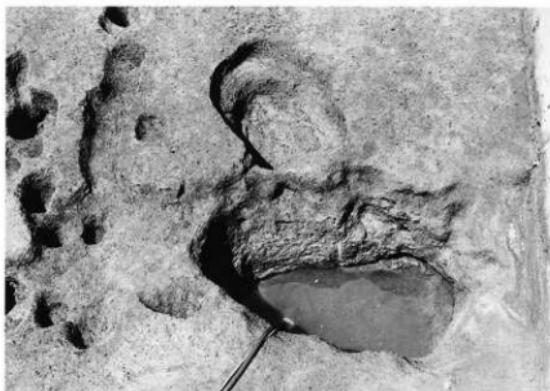
SK09・SK10 完掘状況



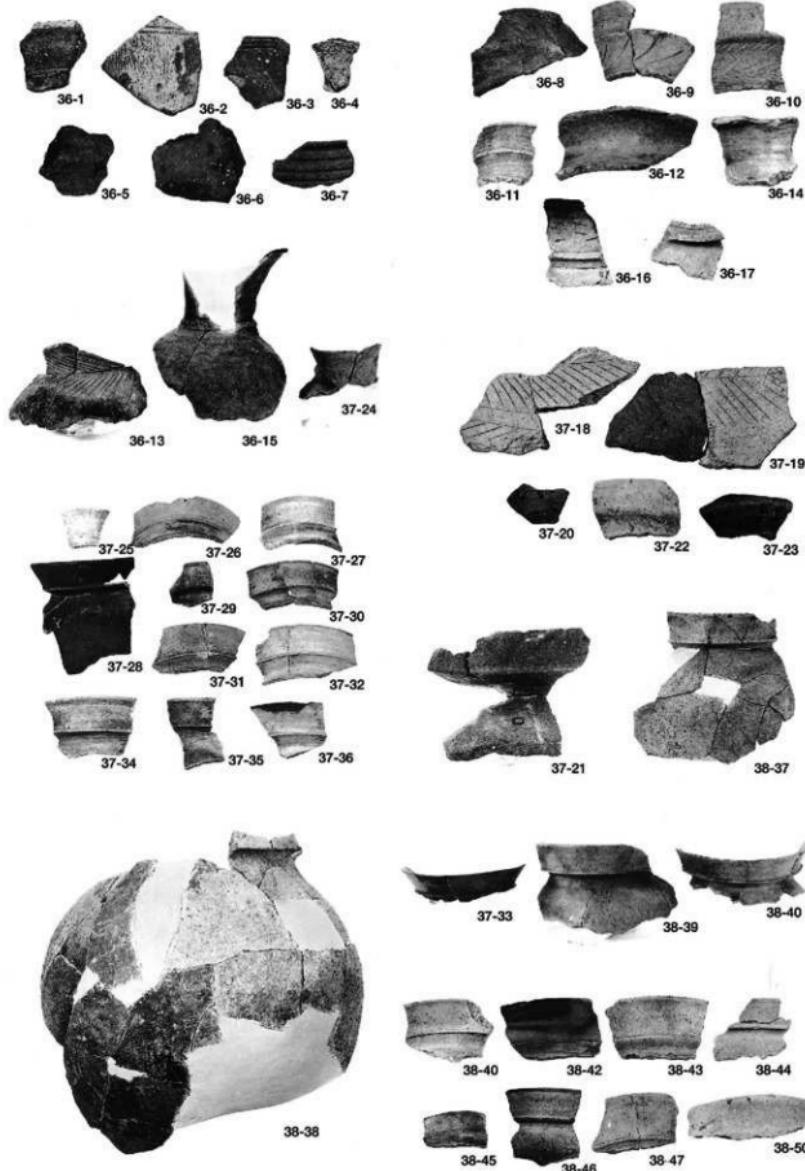
SK11 完掘状況



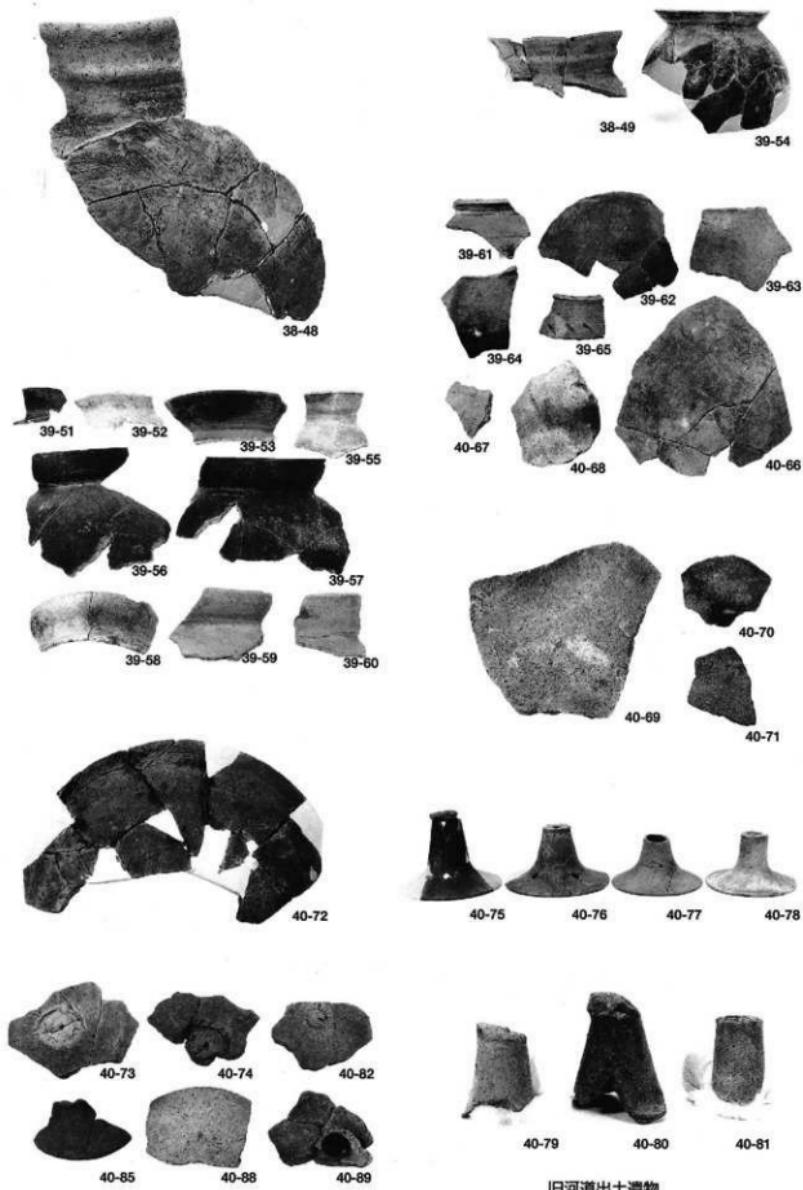
SK13 完掘状況



图版22



旧河道出土遗物



旧河道出土遺物

图版 24



40-86



41-87



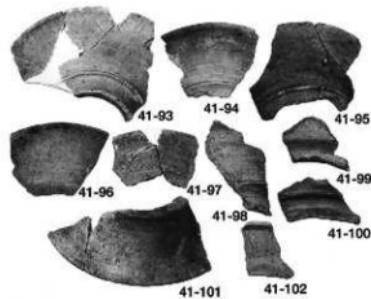
40-83

40-84

41-90

41-91

41-92



41-83

41-94

41-95

41-96

41-97

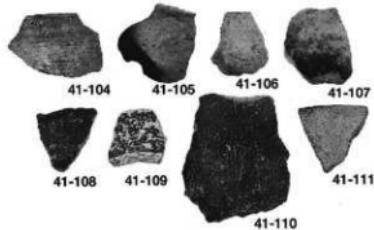
41-99

41-101

41-102



41-103



41-104

41-105

41-106

41-107

41-108

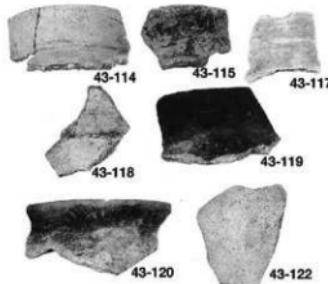
41-109

41-110

41-111



42-113



43-114

43-115

43-117

43-118

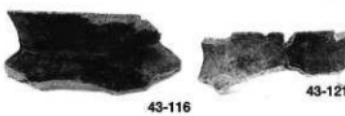
43-119

43-120

43-122



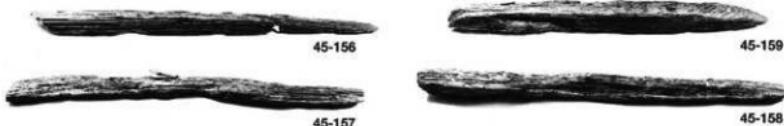
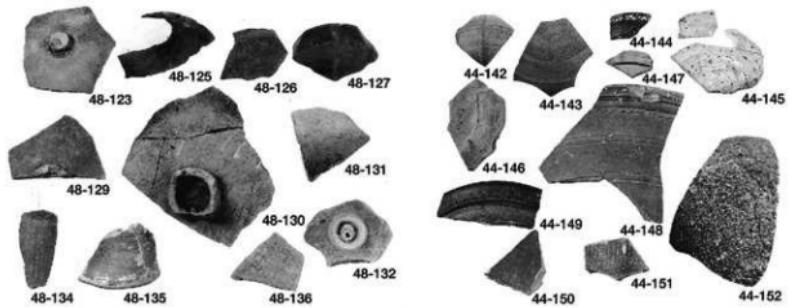
43-112



43-116

43-121

図版25

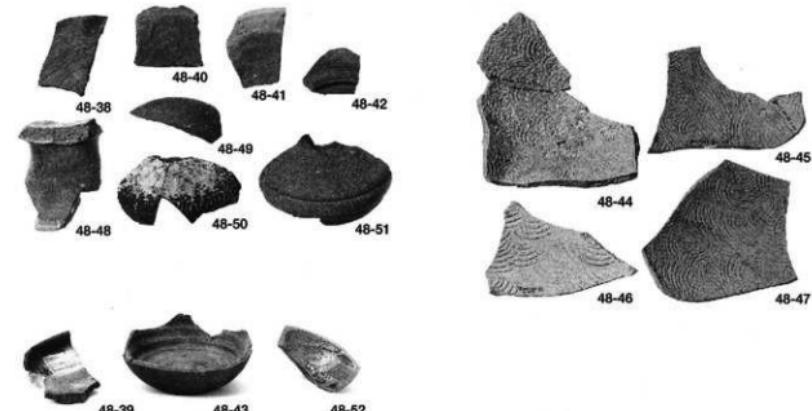
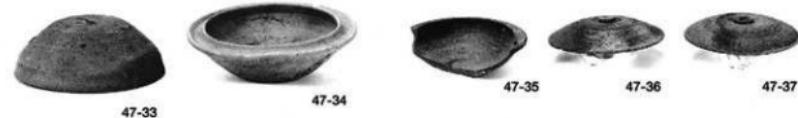
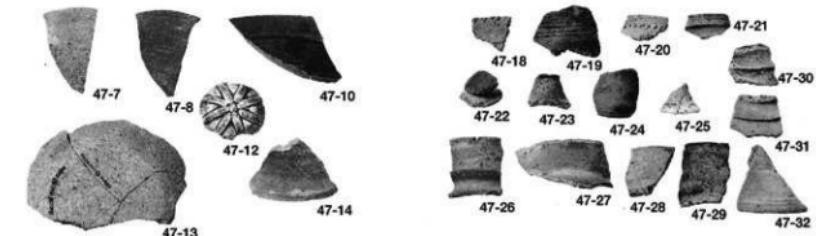


旧河道出土遺物

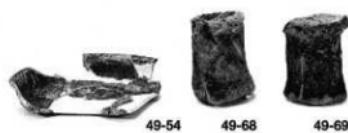
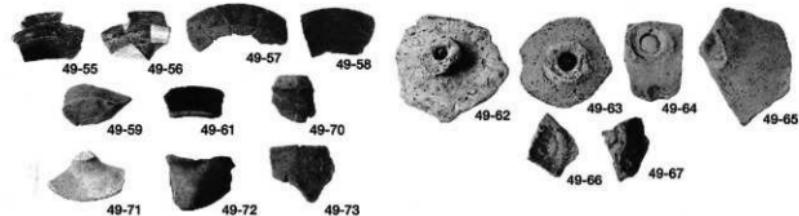


SD01 出土遺物

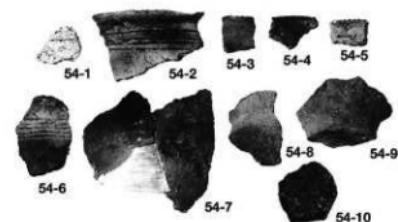
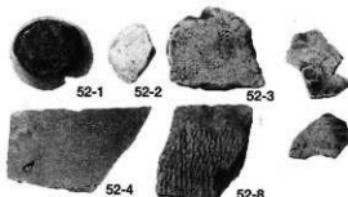
図版26



SDO1 出土遺物



SD01 出土遺物



SD03 出土遺物

図版28



SD06 出土遺物

SD07 出土遺物

SD20 出土遺物

SD21 出土遺物

